天滿天神の信仰の變遷（下）

文學士　長澤賢海

林羅山は「異端之爲害也人易惑也」といひ、伊藤東涯は「渡唐之事其事虛談。固不待辨也」と論じた事實問題からいへば、其の通りであるが、天滿天神の信仰の發達の上からは、誠に興味ある說であるばかりでなく、室町時代の世相の一端を窺ふに足りる問題である。

凡そ室町時代の世相ほどローマンテックであつた例は他の時代にはない。ローマンテックと謂はうか、宗教的といはうか、或は迷信的といはうか、一種不可思議な思想の漲つて居た時代である。室町時代の末の頃に、七福神賊といふものがあつて賊が七福神の裝ひをなして人家に押入ると、人々が福神の光來は目出度いと謂つて財寶を出して與

（四）天滿天神の渡唐參禪

室町時代に入つて、天滿天神の信仰に及ぼした禪宗の影響の今一つ重大なるものは天滿天神が支那に渡つて、禪を學んだといひ、之れに關聯して數多の信仰が湧き、それがまた菅神の神格の發展に大なる關係のあつたことである。

菅原道眞は一度遣唐使に任命されたが、海路の困難と唐の內亂とを理由として、之を辭退されたことは周知のことで、道眞が入唐した筈のないことは明白であるにも係らず、天滿天神の渡唐といふことを、五山の禪僧等に依て唱へられた。江戸時代の漢學者などは、頻りに此說を非難した。

へたといふことであつた。斯る話は蔭涼軒の記錄や、臥雲日件錄、碧山日錄等に澤山見える。臥雲日件錄に犬追物の沿革を說く咄などは、實に珍無類である。また之れも同書に或る關東の老人がいふには義滿といふ苦行士が京の北山に住して居て法華經を百部を書いた功德に依て、將相の家に生れた。將軍義滿がそれであるといふ意味の咄が書いてある。此の而も同書の記者周鳳は之を評して「予謂、雖涉怪誕、而亦未可無此事歟」といつた。總べてかやうな世相を十分に辨へないでは、謠曲の筋書きなど餘りに人情をかけ離れたものと考へられ、能が當時の社會を背景として居るものであるといふことも解らなくなるが、これに反して此の世相を十分了解して狂言を見ると、狂言にある矛盾が益々面白く感ぜられるのである。

かやうな世相の中に於ては、將軍義滿は「大明皇帝」の生れ變りであると眞面目に信ぜられ、又白樂天が日本に渡り、住吉大明神に逢ひ、「白雲如帶繞山腰」といふ句を作つたといふ咄も事實と受取られたのである。又いつの頃よりか、達摩大師が日本に渡り來り、聖德太子が參禪せられたといふ事をいひ始めた。勿論禪宗が弘通せられて後起つた傳說であつたが、室町時代の初めの頃には、大和片岡に一宇を創めて、達摩の墳と傳へられ、之を達摩寺と號せられた。東海瑞華集に達摩寺記といふ一篇がある。それを見ると義滿の頃は破屋が一間あつたばかりで、內に達摩と聖德太子との像を並べて安置してあつて、一禪衲が之を居守して居たとあるから、室町時代の初めの頃はさゝやかる草菴であつたのを、後追々著名なものにしたのであるらしい。天滿天神渡唐のことも全く之と同じ調子を以ていひ初められ信じ始められたのであらう

無準禪師は宋の光宗の紹熙五年(建久五)に出家し、諸山に巡遊して諸師に參し、後終に玄旨を悟り

宋主の命を受けて徑山に住し、佛鑑禪師の號を賜はつた高德である。天滿天神が此禪師に參禪したといふに就いて種々の說があつた。北野誌に收られて居る「勢州安濃津大寶院藏兆殿司畫幅贊」や梅城錄に引用してある「悟心和尙天神贊」等の說を擧げると、明德年中、或る僧侶が夢に人一人が其僧の側に直立して居て、風體は「龍鳳之姿。仙冠道」といふやうであつて、双手を叉み、袖に一枝の梅を挿んで居るが、やがて瀟洒として自宅に逍遙して居る。其僧之を不思議に思つたけれども、敢て誠敬して其名を問はなかつたが、更に傍に他の人が居て、之は北野の天滿天神で、徑山の室に入りて無準の衣を傳へたのである云々と曰つたと思ふと、遽に目が覺めた。其の僧之を不思議として、南禪寺の海壽(藏光禪師)の許に至つて之を告げた數年を經て、應永の初年、佐忠菴といふ者が來て菅神の像を出して示すのを海壽が見ると、數年前或る僧から聽かされた其の僧の夢の菅神と符合して居るので、「北野菅君、尙古賢臣、盛德於今、日久維新、不離風意、深明聖意、不卽世人、乃現天人」と贊した。之から人々が菅神無準に參ずといひ初めたのであるといふ筋書きである。

又同じく梅城錄に引用してある、少林肯翁(惟肯得嚴)の天神の贊に據ると、無準自ら天神が來て己が室に入り、金縷の伽梨伽を授けられた夢を見、之を世に披露したのが天神の無準參禪の故事の元であると稱せられる。臥雲日件錄の寬正七年五月七日の條に、等持院の院主梅室が來訪して語る所を左の如く記してある。梅室が初年の頃將軍義持に侍つて居た頃、大內盛見が義持に一幅の天神像を献じたのを覺えて居るが、其の天神像の筆者は牧溪、贊が無準で、贊に小序があり、其の二三句に「凌宥峰頂夢醒后、袖裏梅花通厭香」とあつたが、前後は忘れたといふのである。此話は得嚴の天神

贊の內容と同じ出所を有するものであらう。勿論無準は菅公を識つて居た筈もなく、從て夢に菅公のことを見ることもあるまじく、又自ら菅神の像に贊する譯がないのであるが、いつしかかやうな說が傳へられたものと見える。

之れに就いて今一つの說がある。それは以前の二つの話は如何にも事實をかけ離れて居るので、それを訂正した體の說であらうと思はれる。世に「菅神入宋授衣記」といふものがあるが、(群書類從所收)それに據ると、東福寺第一世聖一國師が嘉禎元年、卽ち宋の理宗の端平二年、徑山の無準に參禪し、居ること七年、仁治二年四月二十日禪師の室を辭し、やがて七月博多に渡海し、太宰府橫嶽の崇福寺に着した。すると其年天滿天神が崇福寺の方丈に入つて、聖國一師に見え、屢々國師の示誨を受け、其夜を以て無準に參得して、親しく僧伽梨衣を傳與せられたといふのである。

之等の諸說の何れにしても、五山の人々は之を事實として眞面目に信じて居たのである。周鳳は或る人の傳者の妄誕とするに對して、「予曰、夫神遊無方者、千江之月、萬國之春也、支那之去本邦者僅一溟渤而已」と論じて居る。又惟肖得巖も之を妄誕とする者の言を聽いて大に憤り、「然佛光禪師室中八幡神君來請佛光、遂來于此方、由來天神參無準、又何疑矣」と主張して居る。蓋し八幡神が佛光禪師(祖元)に參禪したといふことは、前に述べた義滿が大明皇帝の生れ變りであるとか、白樂天が住吉神に逢つたとか、聖德太子が達摩に參禪したとかいふと全く同筆法である。之れと同じ話で、今一つ著名なのは、別峯和尙が天照大神から袈裟を授けられたといふことである。之れも北野誌に收めてある永德二年の奧書きある皷山大隨といふ僧侶の「天照大神相傳袈裟記」といふものに詳記される。禪宗の人々にかうした一種のローマン

チックな信仰の深かつたことは、天神に就いても亦かやうな信仰を附會するに至らしめたものであらう。

天滿天神が渡唐して無準に參禪したといふ樣な信仰が起ると、此の方面に係はる天神の利生は一段と發揮せられたのである。一例を擧げると、琉球神道記（北野誌）所收に琉球に菅神勸請の由來を記してある。それに據ると、王尙元の代、明古米村の林氏大夫が入唐船の上使として渡唐し、章州の梅花の海にして船覆り、乘衆百人に及んだが、林氏一人梅が枝に取着いて救はれた。其人は常に天神を信じ、「何くにも梅さへあらば我とされ、心つくしに外なたづねそ」といふ歌を吟じて、天神に法樂して居た功德であると思つたとある。渡唐船が北野神を特に崇敬したのはかやうな信仰に由來する所もあつたのであらう。

かくて菅神が禪宗に關係深き神として利生を示す樣になつたのに禪家が與つて力あつた所から、我神祇の中でも一種特別の取扱ひを佛家から受けたのではあるまいか。我が佛寺に鎭守あり神社に神宮寺あるは、極めて普通のことであるが、流石に淨土門、殊に眞宗に於ては甚しく之を忌避したものである。眞宗の寺院には神氣がないのは宗義から自然に生れて來た習慣であるが、天滿天神の像ばかりは毫も之を忌まない。我が鄕里越後の習慣では正月が來れば、必ず天神の像をかけて之を祭るが一般の風習で、眞宗の寺院でも座敷の床の間に菅神の像をかけ、神酒を供へ、おかざりも供へれば、燈明をも供へること、恰かも三月の上巳の節句に雛祭りするが如きものである。それも菅神信仰の發展が、特に佛敎に由ることの多かつたのが原因ではあるまいか。

（八）東山式繪畫の影響

東山式繪畫、卽ち五山繪畫であるが、其理想とする所は五山文學のそれと全く同じであつた。五山の禪侶が頻りに詩を弄んだものは、天地自然、森羅萬象の詩情に託して、文字を以てしては書くこと能はざる、言葉を以てしても語ること能はざる眞諦の玄妙を傳へやうとする爲めで、五山の禪侶の詩は卽ち禪であつた。彼等の試みた繪畫も亦其言ふべからざる、書くべからざる玄旨を水墨の間に暗示しやうといふのが本來の價値である。併し室町時代の中頃から後になると、詩は禪から離脫して文學となり、繪畫も亦禪と絕緣して美術となつた。而して五山の文學として、東山の繪畫としては旣に業に其意義を失つたやうに思はれるが、外見文學として美術として益々其技巧が發達した。

技術が益々複雜になり巧妙になり題材なども亦益々他方面となり、唐宋以來傳說的な禪繪の題材であつた。布袋であるとか、三笑であるとか、四睡であるとか、鍾鬼壽老某の仙人某の菩薩居士羅漢などゝいふ部類を脫して、新しき方面に題材を求めやうとした。加ふるに室町時代の初めの頃から禪宗が全然日本固有の習慣を創めるやうになり宗義を作るやうになつてからは、其の繪畫の題材の如きも、自ら之を國內に求めやうとしたのであらう。

之に對して、時代の世相の特色であるロマンチックな思想が著しく働くのであつた。そして聖德太子、武內宿禰靑砥藤綱の如き國史上の人々も多く繪となつた。住吉神、八幡神、天神、大黑天神などの神祇も亦同樣であつた。浦島の咄も高砂の咄も桃太郎の咄も皆七惡神や荒神や七福神の咄も繪となつた。天滿天神もかくて繪となり、天神に關係した數多の話も亦繪となり、或は天滿天神に關係のないことまでが繪畫の技巧上からして關係

あるかの如くに描かれ、言ひ傳へられ、信ぜられるやうになつた。

天滿天神の畫像の最も普通なるものは束帶像でそれに梅枝を配したのが多いやうだ。而して立像ならば手を叉いて袖に梅枝を挿せるといふ體であつた。梅持天神ともいふべきであらう。次には無準に參禪したといふ信仰から法體像を描き始めたのである。渡唐天神像といふものも亦頗る多かつたと見えて五山の諸衲が家集を見ると、渡唐天神贊といふものが非常に多い。北野誌には義政の自畫の天神像の贊が見えて居る。

天神自在座遊方、　不隔扶桑與大唐
錦上添花參佛鑑　椽從入室以前香

古畫備考には足利義榮の描いた渡唐天神の繪の題字が載つて居る。類聚名物考の渡唐天神像の條下に

冷泉爲村卿のの給ひしは、渡島の神僊なり、左遷の後、太宰府へおはしまして、衣冠をぬがせたまひて、袈裟をかうぶらせ給ひし御さまなり、秘説のよしなり

とあるから、此種の天神の像には梅を持てる束帶の像や、法體の像とはまた違つて、餘程變つた圖もあつたと見える。連城亭隨筆に三條西實隆の描いた渡唐天神の像を見たら「紅梅の枝を持ておはす」像であつたと見える。

又渡唐天神に關聯して、描き出されたかと思はれるものに、飛來天神像といふものがあつた。山城名勝誌に「廣隆寺緣起云飛來天神者亙三國靈神也爲當寺三論守護自新羅國飛來由、依日藏上人夢中之告、奉仰請于當寺、神容白髮老翁矣」とある。

又世に繩座天神像といふがあつた。北野誌に收められる瑞林集といふ詩集に、繩座天神像と題して

名蓋一時風雅士、　風霜籠遇位三臺
天使廣覽海西路、　益增信人在神祭

とある。又世に吐火天神像といふがあつたと見える。同じ詩集の中に、吐火菅神像と題して、

游履人間威德天、　靈跡不測是神仙
變色蹔酒滅災火、　菅廟嚼榴噴餘烟、

とある。蓋し火吐天神像は古く火雷天神といつた神號の意味から起つたものであらうか。或は雷に關係がなく、菅神の怨恨によつて京師に屢々火災があつたと稱せられたことから起つた圖樣かも知れない。

又畫潭隨筆に

菅公自筆の像といふ畫軸あることなり、多く袍にゑがく是うたがふべし、上古黑色は褻服たり、四位以上の人黑色を平生の服とするは後世の事なりとぞ、自像は黑きあるべき謂れなし、是は後世菅公を慕ひて像をゑがき、あるひは菅廟へおさめしが殘れるなるべし。

とあり閑田耕筆に

或寺の開扉に水鏡天神の像あり、御自作のよしをいふ、其緣起は天拜山に登り、天帝に祈請し、既に上天まします時に水鏡を見て作り給ふよしなり、其像雲上に怒怒ましますさまなり、可笑、此期に臨み、いづれの所に材を求め、いづれの所に彫刻し給ふや、雲中より投じ給ふや、（下略）

とある。前に擧げた繩座についた天神像をつなしき天神とも稱へた樣である。「ねざめのすさび」に、

南畝子の說に世につなしき天神の像あり。これは菅公の圖を人にもとめられし時畫工のおもひよりてしきものに圓坐をかきそへたるものなるべし、この圓坐は讃岐圓坐にて菅公いまだ昇進したまはざるまへにさぬきのかみとなり給へれば、それをおもひてゑがきたるなるべし、といはれき、おもしろき說にこそ、

とある。別說として珍らしき說明なれども、完全なる說明とは合點しがたい。

以上最後に擧げた三四の圖樣は、果して室町時代から起つたものか、遽かに斷じ難いけれども、まづ當時からかやうにいろ〳〵と描き出されたものであるとは、大概推定し得られるのである。此外にもまだ〳〵いくらでもあつたであらうと思ふ。

次に菅神には全く關係のないもので、いつしか菅神に附會されたかと思はるゝものに、牛天神像といふものがある。或は牛にでも乘つて牧童のやうな姿でもした天神像かと思はれる。菅公が牛に乘つたり、或は之れを引いたりする謂はれはないのである。之れに就いては、物茂卿の南留別志に說明して、「牛天神は物部大人神社なるべし、大人をうしとよむ、日本紀に見ゆ」とある。東京下谷上野公園(山下)內に牛天神がある。之れは湯島の天神と共に物部天神の遺跡かと思はれるから、或は上野公園內の牛天神も大人天神で、上代龍岡、向岡、忍岡一帶に土着した物部氏は物部大人の關係の物部氏であつて、其遺蹟であるかも知れない。それは別として、牛天神と稱して、牛を天神像に配するは、かゝる所から生じたものでもあらうか。

又世に業平天神と稱するものがある。之は特別の圖樣などのあるものではないらしいが、其名は著名なのである。之れも南留別志に「業平天神といふは、成平といふ相撲取をまつれるなり、今はおほかた在五中將となりぬ」とあるが、感服しかねる說明である。恐らく菅神には全く關係のない神祇であらう。

四　結　語

道眞の薨去後其靈を太宰府に祀り、ついで之を北野に勸請した頃から、俄然として其信仰が弘まり、利生を現じ、更に代々を經てつひに大政威德天滿大自在天神として、朝野の崇敬を集めるやうになつた。之に就いては其時代々々を支配した佛敎信仰の影響を受けたことが莫大であつた。いひ換へれば、其時代々々の人々の信仰に相應する樣に天滿天神の信仰も變つたといひ得る。更に進んでいふならば神は人に依て威を增すのであるから神の信仰は之を崇敬する人々の信仰に支配されて

發展するものであるといふことになる。

江戸時代になつて禪宗萬能の時代は去り、五山から起つた漢學が獨立して、社會の支配者となつて室町時代に於ける禪宗の位置を定めるやうになつた。念佛宗や眞言宗は依然盛んであつても、一般の智識階級を支配する勢力は既にない。念佛宗の勢力は鎌倉時代に及ばず、眞言宗の勢力は又平安時代に及ばなくなつた。

江戸時代の中頃から國學が起つて、國學者の排佛的傾向が漸く現はれ、儒教榮えて、又漢學者の排佛的傾向が現はれ、神道勃興して、神佛背離の傾向が生じた。かゝる世相に順應しやうといふ神祇の信仰は、以前三時代に於て發揮せしめられた方面に對しては自ら利益が減じたのも道理である。果して天滿天神は怨恨の神である、惡事懲罰の神である、寃罪を要ぐ神である。正直を守る神である。後生まで救濟して、淨土德生をなさしむる、といふ樣な信仰は或は薄らぎ、或は全く絶えて終つた。

江戸時代になつてからは前時代に非常に豐かであつたローマンチックの思想が減退して、總べて社會の思想が現實的となり、物質的となつて來た。かくて東山式繪畫のローマンチックな、詩的な、美的な觀念から生じた數多の通俗信仰は多く亡びた。尤も長い間の習慣の名殘として、雷鳴時に天神名號を床にかけて、落雷を防いだやうな風習は絶えなかつた。併し其主要な信仰は學問守護の神文道の太祖とするやうになつた。室鳩巢は立身出世を北野社の社頭に祈願し、新井白石は江戸湯島天神を信仰し、塙保己一は群書類從編纂に際し常に平河天神を祈願し、之を己が屋敷に勸請して、朝夕心經を讀誦して、其成功を祈つたといはれる。明治大正の今日に至りてはいかゞなものであらうか。

右天滿天神の信仰の變遷は私が大正三年神道談話會例會の席

上で講演した原稿に多少の修正を加へたものである。脱稿後友人の注意に依つて西田魚澄兩學士が昨年頃から同樣の論文を『歴史と地理』誌上に發表されて居るといふことを知つた。これを見ると大方私の申す事となつて居つて、些か蛇足を添へたやうな感もあるが、併し觀察の立場が少からず違つて居るから其儘掲載を乞ふことにした。特に記して兩氏及大方の諒察を希ふ。

徳川時代に於ける國學者對儒學者論爭

文學士　清原貞雄

一

徳川幕府が風教に對する政策として儒教本位を採り、特に朱子學を官學として保護せる結果、林家を中心とする此一派が殆ど學問界を獨占するの概ありしは今更言ふを須ゐず、然るに之に反抗して儒學界には中江藤樹の王學派、荻生徂徠の古文辭學等の諸派勃興したりしが、之と共に國學界には復古派起り、契沖、荷田春滿に發し、賀茂眞淵、本居宣長を經て、平田篤胤の高唱に至り殆ど一部の思想界を風靡したりきゝ。斯くと見ては從來幕府の保護を利用して、永〳〵學界獨占を期したりし儒學者流の如何で默過すべき、果然復古國學者に對する應戰の火蓋は眞淵の國意考に對する海野公臺の讀國意考に依りて開かれたり。

抑儒學者の支那本位に對して、國民的自覺ともいふべきもの〻發現は早く山崎闇齋等にも見え、水戸光圀を頭目とする水戸學派等も既に絶叫せる所なり。其他純粹の儒學者にして日本主義を抱ける人も無きにあらず。然れども之等は今問題外な